

私が住む倉敷の美観地区（市条例）は「観光地」として知られている。その中の大原美術館も「観光資源」と呼ばれる事がある。たしかに、倉敷は毎年多くの観光客を迎え、大原美術館では世界各地からのお客様が充実した時間を楽しんでおられる。観光関連の仕事で生活している市民も少なくない。ここは、まぎれもなく「観光地」である。

そうであるには違いないが、私たちは、倉敷が外見のみを飾った「観光業のための観光地」になったり、大原美術館が「町の集客装置としての観光資源」になってしまったたりすることは、厳に避けなければならないと考えている。

もちろん、この街に多くのお客様を迎えるのは嬉しいことである。私たちが愛で育てたものに親しんでいただき、美しい街の美しい暮らしを共に楽しんでいただくことも大きな喜びである。

また、お客様へのサービスに関わるさまざまなビジネスが繁栄することも地元にとっては大変重要で、少しでも多くのお客様をこの地に迎えて、良い時間を過ごしていただくための努力と工夫を怠ることは許されない。

倉敷—「まち」の価値と市民生活の美しさ

～ お客様の数は二番目に大切な指標と考えたい～

公益財団法人大原美術館理事長 倉敷商工会議所名誉会頭 大原 謙一郎

しかし、これを自己目的化させてはならないと、私たちは自戒している。集客を全てに優先させ、街自体の価値や、市民の誇りと生活をなおざりにしてはならない。生活と文化が「観光の下僕」になってしまったら、倉敷も大原美術館も、その日から劣化しはじめるに違いない。

そういう意味で、私たちは、いわゆる「入込み客数」は、「二番目に重要な指標」だと考えたいと思う。一番重要なのは、この街の価値と市民の生活の美しさである。大原美術館にとっても、館の価値と使命が最大の関心事である。お客様の数はもちろん重要だが、それは、一番ではなく、二番目に重要なことである。そう考えてはじめて、街も、美術館も、魅力を薄れさせずに永続することが出来るのである。

観光事業は、国の姿を問い、地元の誉れを高める事業である。そうである以上、「観光地」に暮らす私たちにとっては、自らの姿を常に問いなおし、本当の地元の誉れを磨くことこそが一番大切なことになる。私たちは、そう心得て、日々自らを省みていきたいと思う。

（おおはら けんいちろう）